多様な時代の“居場所”

優れた彫刻家は形を造り出すのではなく、元からそこにあった形を取り出す、という。

イタリア盛期ルネサンスの巨匠として知られるミケランジェロの有名な言葉がある。

私は大理石の中に天使を見た。そして天使を自由にするために彫ったのだ。

ミケランジェロ・ブオナローティ

また、夏目漱石の『夢十夜』という夢物語の中にも、鎌倉時代初期に活躍した仏師、運慶が仁王を彫る様子を、なぜか明治時代の野次馬が観ているという不思議な話が書かれており、その中で観衆の一人はこんなことを言う。

「なに、あれは眉や鼻を鑿（ノミ）で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだからけっして間違うはずはない」

夏目漱石『夢十夜』第六夜より抜粋

勝田えみはまさにそんな彫刻家だ。

勝田の作品の特徴として、木彫による、子供のような柔らかな肌をした人物表現が挙げられる。日本を代表する木材の一つである木曽檜の木肌部分を活かし肌そのもののように彫り出した表現からは、ほのかな血色が感じられ、マットな質感で彩色された服飾部分との対比によって、観る者が思わず触れたくなるような生気を醸し出す。

「Tiger Girl」2018 h108×w47×d27cm 檜、樹脂

赤く染められた鼻は顔に匿名性を与えるもので、”誰でもあって誰でもない、私であって私ではない誰か”ということを表し、作品に普遍性を持たせ、鑑賞者が入り込める隙間を与えている。その時その時の心境や状況により作品の表情が変化して見えることを体験することにより、私たちは勝田の作品を、自分を映し出す鏡のように認識することができる。

観る者に最も近い「人」という具象を用いながら、勝田が主に表現するのは、自身が目にした景色や現象、フェミニズムやジェンダーなどの社会的な背景といった、一見して捉えることが難しいような、複雑に混ざり合った概念や状況だ。2018 年、自身初のニューヨークでの個展「Emi Katsuta:That Fantastic Someone」(SEIZAN Gallery、New York) では、勝田が愛用している日本のスニーカーブランド、オニツカタイガーの「MEXICO 66」のゴールドを履いた「Tiger Girl」という作品で、拡声器を手に前を向く女性の姿を通して、#MeToo 運動や女性の強さへのオマージュ

を込めた。2022 年の「勝田えみ ― Someone's Whereabouts ―」(靖山画廊、東京) では、長引く新型コロナ感染症の流行や、国外で起こった紛争や武力侵攻など、外的要因による、生活様式や価値観を根本的にゆるがすほどの世界の大きな変化を受け、強要され得る複数の「居場所」が表現された。リモートワークや住む場所を失うことといった物理的な「居場所」、感染症に対する考えや、ロシアによるウクライナ侵攻に対する考え方の違いから生まれる心理的な「居場所」、物語や歴史の中で、主人公や善の側とされる者たちとそうでない弱い者や悪の側とされる者たちのような、決められた役割としての「居場所」、それらの「居場所」は、自分自身やその事柄自体には何も変化がなくとも、国や宗教、属する社会によって移り変わっていくものであることが作品を通して私たちに示された。

本展「勝田えみ ― One's Whereabouts ―」では、前述の、自分自身の視点と関連した Someone's Whereabouts（誰かの居場所）から、さらに「他者の存在」へと視野を広げ、One's Whereabouts（各自の居場所）から見える景色を疑い考えることへと発展していく。

本展で表現される九つの尻尾を持つ狐＝九尾や、稲荷神の使いとされる白狐、商売繁盛の縁起物で知られるまねきねこといった狐や猫が変化したような妖怪は、人を惹きつける魅力を持つが故に、私たち人間の味方とも敵ともされてきた存在と言える。

例えば九尾は、平和な世や明君と共に現れる瑞獣として崇められた一方で、美女に扮し、時の権力者を惑わす邪悪な妖怪として語り継がれている。この邪悪な妖怪という説は、後世で生じた誤解、ないしは創作上の演出による可能性もあり、諸説存在する。白狐も、神の使いとされたり、人をたぶらかす妖狐と言われたりする。
金運や人を招くというまねきねこの由来も民間信仰を含め多数存在し、どれが正解かは分からない。はっきりしたことは誰にも分からないのだ。時代が進んで、色々なことが明らかになっても、おそらく分からないままだろう。

このような性質の転換は、何も妖怪に限ったことではなく、物事や人物に対する善か悪かの判断は、日常的に、至極勝手に行われている。インターネットを通して絶え間なく流れてくる出来事に対し、限られた一要素を知っただけの状態で、短絡的に判断を下すことがある。よく知らなくても、そのわずかな要素を元に即座にジャッジして意見を持つ。そして、知らなかった別の面が明らかになった時、前の判断はあやふやなものになり、容易に覆されることもあるだろう。善か悪かは、そのもの自体の性質の変化というよりは、それを判断する側が転換させているものとも言える。

「九尾 -Ann-」2023 h81×w38×d35 cm
檜、アクリル着彩、台座に一部布

「白狐 -Vivienne-」2023 h37×w26×d18 cm
檜、アクリル着彩、台座に一部布

「各自の居場所からの景色が信用できるのか、そんな単純に分けることが出来るのか。」

本展の作品群には明暗がある。

明と暗について。勝田は作家という職業柄、一日が 24 時間では完結せず、26 時間サイクルで 2 時間ずつずれていく生活を送り、とても早い時間に起きる時もあれば、夕方に起床する時もあるそうだ。夕方に起床した時は一晩中起きていて朝に就寝する。昼はない「夜型」のサイクルになる。「夜型」の時の勝田は自分の中に潜っていく感覚があり、社交性は低くなるが集中力が爆発しそうなほど研ぎ澄まされるのだと言う。逆に「昼型」のサイクルの時の勝田は社交的になる。

「The smell of brunch」2023 h33×w11×D11cm
檜、アクリル着彩、台座に一部布

私自身も似たようなことを経験した。最も運動から遠ざかっていた大学時代の私と、社会人になり趣味で始めた格闘技で減量に挑戦した時の私の違いだ。大学時代の私は夜更かしをしがちで眠りも浅く、夢想を好み、物事に対する判断は曖昧であった。しかし、減量時の私の眠りは深く短くなり、物事の判断も明瞭に素早く下せるようになった。
減量という過酷な状況に際して身体が生命の危機を察知した結果だったのかも知れない。他人から見た私の印象は、時期によって真逆のものとなる可能性がある。

外部からもたらされた状況によってそのように変化する私の、本当の姿はどちらなのかと問われると、どちらも自然に現れた自分でありどちらが正解かは自分でも分からない。そしてまた奇妙なことに、「その時期の私」を知る知人に囲まれると、たとえ「現時点では別の私」であっても、言動は自然と「その時期の私」になってしまう。この現象は、他者から期待される役割を無意識のうちに演じている、と言えなくもない。

勝田が提示する対立する 2 つの要素、善と悪、明と暗、光と闇、真実と嘘、を考える時、脳裏によぎるのは、他者の存在によって左右される自分の相対的な位置の変化や、外部から与えられた要素によって形作られる自分の内面の変化、無意識のうちに演じてしまう役割、ということである。こんなにも不安定なものを通して、私たちは自分以外の物事を判断しているのだろうか。

多様な時代において他者との関係に戸惑い、自分自身の所在も分からなくなってしまった時、私たちを唯一導くのは、勝田が提示する「考え続ける」ことなのかも知れない。

見えているものを疑い、考え続けることは、誰かや私をその場所に固定しない。それは唯一の救いである。

文・大田康代